

## マルコによる福音書 9 章 38 節～50 節

2017 年 2 月 23 日

古本 靖久

- 1、聖歌 388 番 「すくいの道を」
- 2、お祈り
- 3、聖書輪読 （新約聖書 80 ページ）
- 4、テキストの位置

二度目の受難予告を語られたイエス様は、これまで宣教の拠点としてこられたガリラヤでの最後の教えを語られます。

前回の箇所で、「わたしの名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は」とありましたが、今回の箇所には「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は」とあります。

つまりイエス様は、子どもや小さな者にどう接するかを、教えられています。それでは小さな者とはどのような人のことでしょうか。

この箇所が終わると、イエス様はガリラヤを離れ、ユダヤに入られます。ユダヤへの道は、エルサレムへの道を、つまり十字架への道を意味します。イエス様はこれ以降、ガリラヤに戻ることはありません。

イエス様はガリラヤの人たちに、最後に何を語ったのでしょうか。

受難への道	8:27-30	イエスとは何者か
	8:31-33	第一回受難予告
	8:34-9:1	弟子であることとは
	9:2-13	イエスの栄光
	9:14-29	信仰と祈り
	9:30-32	第二回受難予告
	9:33-37	弟子への教育
	9:38-41	よそ者の奇跡行為者
	9:42-50	つまずきについて



イエスが宣教した町々

## 5、節ごとに

### ◆よそ者の奇跡行為者

9:38 ヨハネがイエス（彼）に言った。「先生、（わたしたちはあなたの）お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わ（ってこ）ないので、やめさせ（妨げ）ようと思いました。」

新共同訳聖書のこの箇所には、「逆らわないものは味方」という小見出しがつけられています。しかし伝統的には「よそ者の奇跡行為者」と言われています。

古代においては、「名前」が力を持って働くと信じられていました。力のある人の名前を唱えることで、悪霊を退治することができると考えられていたようです。使徒言行録にもユダヤ人の祈禱師たちの中に、悪霊に取りつかれている人に対しイエス様の名を唱えたという記事が書かれています（使 19:13）。

またエジプトで出土したマジカル・パピルスという古代エジプトの治癒呪術を描いたものには、ユダヤ教の聖者の名前とともに、イエス様の名前まで書かれていたようです。

わたしたちも目の前にとっても痛そうにしている人がいたら、お祈りをしたいと思います。そのときに「イエスのみ名によって」祈ることは、イエス様の名前を使って悪霊退治をすることと通じるのかもしれませんが。

しかしゼベダイの子で漁師出身のヨハネは、「わたしたちに従ってこない人間はけしからん」とその行為をやめさせようと思いました。弟子たちですら悪霊を追い出すことに失敗した（9:18）ので、嫉妬したのでしょうか。自分たちに加わろうとしない人を容認する気がなかったのでしょうか。それともイエス様に従うことは、自分たちだけに与えられた特権だと思っていたのでしょうか。

9:39 イエスは言われた。「やめさせ（妨げ）てはならない。わたしの名を使って（で）奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい（を言えるものはいない）。

ヨハネはイエス様が、自分の行為を褒めてくれると思ったかもしれませんが。しかしイエス様は、妨げてはならないと言われます。イエス様の名のもとに働く限り、それがたとえ部外者であったとしても、その隔ては取り除かれるのです。

教会は 2000 年の歴史の中で、何度も分裂を繰り返してきました。その中で相手のことを批判し、異端だと排斥したこともありました。しかし「イエスの名において」なされていることを、他人がとやかく言うことはできないのです。

9:40 わたしたちに逆らわない（反対しない）者は、わたしたちの味方（をする者）なのである。

マルコ福音書のこの言葉は、あえて反対する者でなければ、みな自分たちの味方であるという意味です。それに対し、マタイ・ルカ福音書では、このように書かれています。

「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。」  
(マタイ 12:30、ルカ 11:23)

マタイとルカでは、人を排除しているように見えます。しかしマルコのこの箇所には、人をできるだけ受け入れようというイエス様の思いが感じられます。

イエス様は、どんな人でも受け入れなさいと命じておられたにもかかわらず、マタイやルカ福音書が書かれたころの共同体が、徐々に排他的になっていったのかもしれませんが。

9:41 はっきり言うておく。(あなたたちが) キリストの弟子 (者) だという (名の) 理由で、あなたがたに一杯の水を (一杯でも) 飲ませてくれる者は、(アーメン、わたしはあなたたちに言う、) 必ずその報いを (失うことは決してない) 受ける。」

わたしたちが心を開くとき、「よそ者」であったはずの人たちは水を飲ませてくれ、ついには「よそ者」ではなくなるでしょう。

そして神さまは、全ての人たちに報いを約束してくださいませ。共に生きる者とされるのです。



<ここまでの箇所から>

教会に限らず町内会や国家など、共同体ができると、排他的になることがあります。そのままの状態では居心地がいい、外からの風を吹き込みたくない、自分のスタイルを邪魔されたくない。またわたしたちの心の中にも、救いは自分たちだけのものであり、他の人には与えたくないという考えもあるかもしれません。

しかしイエス様は罪人を救うために来られました。また神さまは、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせるのです。

## ◆つまずきについて

9:42 「(そして)【わたしを】信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼(ろばのひき臼)を首に懸けられて(結わえ付けられ)、海(の中)に投げ込まれてしまう方が(まだまだ)はるかによい。

「信じるこれらの小さな者の一人」とはどのような人でしょうか。本にはいろいろと書いてありました。よそ者の奇跡行為者、何らかの仕方でイエス様に従おうとする者、小さな子どもたち、キリストの弟子だという理由で水をくれる人、霊的に貧しい人、信仰的・社会的に弱い立場にある人、謙虚なキリスト者、イエス様を信じて日の浅い人。

またわたしたちの心の中にも、誰かの顔が思い出されるかもしれません。ひよっとしたら自分の顔かもしれません。

イエス様は、そのような者をつまずかせるなどと言われます。つまずくとはギリシア語で「スカンダリゾー」、英語の「スキュンダル」の語源です。その意味は不祥事やよくないうわさですが、小さな者の信仰を揺るがすようなことをしてはならないというのが、イエス様の命令です。



つまずかせるくらいなら、ろばが引かないと動かないぐらいのひき臼を首に結わえ付けられて、海の中に投げ込まれる方がまだそうです。それほど、このイエス様の命令は熱意をもっているということです。

9:43 (そして) もし片方(あなた)の手があなたをつまずかせるなら、(それを)切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちる(入り込んでしまう)よりは、片手になっても命にあずかる方がよい。†

9:45 (そして) もし片方(あなた)の足があなたをつまずかせるなら、(それを)切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。†

9:47 (そして) もし片方(あなた)の目があなたをつまずかせるなら、(それを)えぐり出し(投げ捨て)なさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。

イエス様は時々、このようなえげつないことを言われます。手や足や目は労働者や職人にとって、とても大切なところでした。そのため、片方でも使えなくなると、生活が大変苦しくなることは目に見えていました。

しかしイエス様は、この際立った比喻表現を用いることで、罪の問題がいかに深刻なことなのかを伝えようとしていたのです。イエス様は実際に自分の体を切り刻むように勧めておられるわけではありません。第一いくら切断しても、罪は消えないでしょう。

そうではなく、イエス様のために自分を否定することの大切さを、改めて教えておられるのです。

**9:48 地獄（そこ）では（彼らの）蛆が尽きることも、火が消えることもない。**

先ほどの部分で、44 節と 46 節は抜けていました。この二節は後代の加筆と考えられておりますが、いずれもこの 48 節と同じ言葉が繰り返されています。

地獄と訳された語は、ヘブライ語で「ゲヘナ」です。これはエルサレムの南にある谷の名前で、そこではモレクという異教の神に、子どもが犠牲としてささげられていました。その後ヨシヤ王によってその場所は払拭され、ゴミ捨て場として使われるようになります。

そのことからゲヘナは、最後の審判がおこなわれる場所を意味するようになり、罪の宣告を受けた人が神さまの刑罰を受ける所とされました。そこにはゴミにたかる蛆がおり、刑罰のための火が燃え続けるのです。

**9:49 （だから）人は皆、火で塩味を付けられる（ことになる）。**

この節は、古来より「謎の言葉」と呼ばれ、意味が確定できないものだと思われていました。写本の中には「なぜならば、いかなる献げ物も塩によって塩づけられるからである」と付け加えられているものもあります。

塩によって献げ物は神さまに受け入れられるものとなります。また火で焼き尽くすことによって、その香りは神さまに届きます。48 節では火は神さまの審きを象徴していましたが、ここでは新たに生まれることを意味します。

新しい命が生まれるときには、陣痛を伴います。同じようにわたしたちも新しい命をいただくときには、審きと同じ火で清められ、火にさらされます。しかしその火によって、わたしたちは塩味がついた者となります。

火も塩も、食品の腐敗を防ぐものです。わたしたちの心も火と塩のおかげで腐ることなく、信仰を保つことができるようになるというのです。

9:50 塩は良いものである。だが（もしも）、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩（それ）に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和（でありなさい）に過ぎしなさい。」

塩に塩気がなくなることは、実際にはないでしょう。しかし不純物が多く含まれ、使い物にならない塩は売られていたようです。

パウロが書いたコロサイの信徒への手紙には「いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば、一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう」（コロ 4:6）とあります。あわせて 50 節の言葉を読むと、塩とはイエス様のみ言葉だと考えることができます。

み言葉は良いものである。だがもしも、み言葉がただの言葉になれば、あなた方は何によって言葉で愛を伝えるのか。自分自身の内にみ言葉を住ませなさい。

イエス様のこの言葉がこのように聞こえたときにはじめて、わたしたちは地の塩として周りの人に働きかけることができるのかもかもしれません。

#### <今日の箇所から>

この後半の言葉は恵みよりも、審きの言葉として捉えられることが多いと思います。しかしイエス様の時代、このような言い方は、人々になじみの深いことわざだったそうです。だからイエス様の言葉を聞いて、聴衆はイエス様が文字通り肢体を切り落とせと言っているのではないことを、難なく理解したはずです。

ではイエス様は何を言いたかったのでしょうか。それはイエス様に従う者とはどういう者かということです。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」とイエス様は言われました。自分を捨てるということは、自分を否定することでした。

自分の肉体に目を向けるのではなく、固執するのではなく、神さまのことを第一に考えることを、イエス様は求めておられるのではないのでしょうか。そしてわたしたちに塩が与えられます。わたしたちの塩は、わたしたちの周囲にいる人たちに様々な影響を与えます。その人たちを幸せにすることも、不幸にすることもできるのです。わたしたちは与えられた地で生かされる塩として、多くの人と共に、キリストの平和のうちに歩むのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は 3 月 22 日(水)10 時 30 分からです。「律法のとらえ方」（マルコ 10：1～12）について学んでいきます。